

【付論】

声点の認定をめぐる二三の問題

——東点のつけちがえの点を中心に——

問題提起

『類聚名義抄』の原撰本系の『図書寮本類聚名義抄』の和訓に施された声点には、

平声点 東点（平声輕の点） 上声点 去声点 入声輕の点 入声重の点

の六つの位置の声点がある。^{注1} その位置は図版Ⅰの如くである。

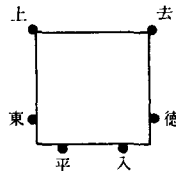
ちなみに、平声点は低平調（○）を、東点は下降調（●）を、上声点は高平調（●）を、去声点は上昇調（●）をあらわす（入声輕の点はノトルのノに、入声重の点はウタフのウに差されている）。

また、和訓の声点のよつてたつ声調体系が六声の体系であると証明されている、今一つの文献である承暦本『金光明最勝王經音義』の点図は、図版Ⅱの如くである。^{注2}

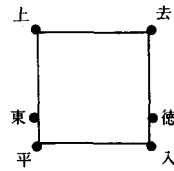
ところが、改編本系『類聚名義抄』諸本の和訓の声点を、「図書寮本」の声点の位置（図版Ⅰ）を基準として認定しようとすると、改編本系諸本では声点の位置がいまいで、^{注3} 認定はかなりむずかしい（図版Ⅱを基準としても同様である）。

ヲサムを例にとる。ヲサムに声点を差した例は「図書寮本」に五例あり、五つとも、

ヲのかなには、図版Ⅰの平の位置に差点されている。それに対し、「観智院本」では、ヲの声点の位置はさまざまである。即ち、①ヲの終画の終りに接しているもの、②終画の終りにのつかるように少し上についているもの、③二画と終画の中間よりや、下めのもの、④や、上めのもの、⑤二画のはじまりの下に接しているもの、⑥二画のはじまりの横についているもの、⑦上にのぞいているもの（ヲヲヲヲヲ）という具合である。「高山寺本」では、オの仮名である



〔図版Ⅱ〕



〔図版Ⅰ〕

が、声点が第三画の下側（図版Ⅰの平の位置）についているもの（オ）と、上側（図版Ⅰの東の位置）についているもの（オ）とがある。これら改編本系諸本のヲ・オの点を認定するのに、「図書寮本」の声点を対象として、平声点か東点かを判別するのと同じ対し方をしようとすると、どう認定したらよいのか途方にくれるであろう。改編本系諸本の声点を認定するのに、普通それほど迷わない気がするの、我々が、一つ一つの語の語調を知っていて、この語には（上上）の声点が、この語には（平平上）の声点がついているはずだというふうな期待をもって、個々の声点にのぞむからに過ぎない。そういう知識を一切捨てて、ただ声点の位置だけに頼るならば、改編本系諸本の声点の認定は、決して簡単ではない。

一般に、声点には「差された点」と「写された点」とがある。「差された点」は、声点の機能からして差し誤られてはならないはずのものである。^{注4}一方、「写された点」は、よほど写しのよい場合でも、うつしあやまりがあるのがむしろ自然であろう。

声点の写しの悪い文献を活用する際に、使用者にとって都合のよい位置に写点されているものだけを随意取り出して活用し、除外したものをかへりみないというやり方は、方法そのものとして反省されなければならない。平東上去の基準位置からはずれた、あいまいな位置につけられた点をどう処理すべきか、正しく写された点と写し誤られた点（平東上去のつばにおさまっているが、つばを誤っているもの）とを判別する基準——誤点認定の基準——はどこに求められるか、といった問題が明確にされなければならない。また一方では、その文献独自の声点の使い方があるかどうかの吟味を進めなければならない。^{注5}そういう問題の究明がなされなければ、その文献の和訓の声点を包括的に把えることはできないであろう。

その一端として、『類聚名義抄四種声点付和訓集成』で対象とした諸文献、即ち、『類聚名義抄』四種、『法華經單字』、『前田本色葉字類抄』、『岩崎本字鏡』、『和名類聚抄』五種、の和訓に施された声点の中から、その位置のあいまいなものをぬき出し、ここに一つの整理を試みたい。

調査対象とする諸文献の略称は、『類聚名義抄四種声点付和訓集成』におけるそれと同じである。なお、『和名類聚抄』は「和・金光明最勝王経音義」は「金」とする。

二 声点の位置があいまいになりやすいのはどんな場合か

I 声点の位置があいまいになりやすいのはどんな場合であろうか。まず、気がつくのは、声点がつけられている片仮名の字体によって、声点の位置があいまいになりやすいものと、比較的なりにくいものがある、ということである。常識の域を出ないが簡単にふれておこう。

①へ・ツ・ニ・ハ・ムのかには、あいまいな位置の点が多々みられる。特に「ゝ」に写された声点は認定に苦しみことが多い。

②ツ・ソ・ヲ、サ・ナ、タ・ク・リといった仮名は、基準がゆれる傾向がある。

ツ・ソについていえば、平の位置は、初画の下かと思われるもの(ツ・ソ)と、終画の下である場合(ツ・ソ)とがある。――加えて初画と終画の中間の写点(ツ・ソ)がある。

ヲ・ヲ、サ・サ、ナ・ナ、タ・タ、ク・ク、リ・リといった具合である。平の基準位置がこうゆれると、上声点との区別が紛らわしいことがある。

こういう基準のゆれは、文献により片寄りがあるのでもないらしい。「観智院本」の一つの巻の内部でもゆれている。一応、詳細に検討する必要がある。

③上の字と下の字との間隔が狭すぎて、下の字には、上声の正当な位置に写点できず、上声点の位置が下り、あいまいな位置になることがある。例えば、

「ヨセタツ（上平平上）〔倚〕 高四オー」

のツの点は、ツの初画の下にツとついている。これは、上のタの終画とツの初画とが接近していて、ツの初画の上に声点がうてない結果とみなされる。上声点のズレと認定すべきである。

以上三つの、仮名の字体に関連するあいまいな位置の点は、『図書寮本類聚名義抄』の片仮名については見られない。声点のうつし方が甘い時に生じるものである。

なお、万葉仮名の場合は、うつしがよくなくても、あいまいな位置の点は表われにくい（但し、誤点はある）。

II 『類聚名義抄』のある標出漢字の和訓の一つとその声点を、諸本間で比較検討すると、「観智院本」には、和訓のかなの省略表記がみられ、それに伴い、写点も異ってくることもある。例をあげる。

「オ _{ロス} ル	オ _{ロス}	下	高	四〇ウー
「ハ _シ メ	ハ _シ ム	造	高	三ウー
「ハ _シ メ ₄		造	観 _{仏上}	ムハ ₂ 」
「ヤ _ス ム	……ヤ _ス し	休	高	五ウー
ヤ _ス ム _し		休	観 _{仏上}	セ ₇ 」

このような省略表記においては、時に、声点の位置が写し誤られて、次のように、わけのわからない位置につけられることもある。

①	ㄱ	カリ	カル	假	高	三ウ五
		カリ		假	觀	仙上
					三ミ	五
					五	
②	ㄱ	タフ		任	高	三ウ五
		タベタリ		任	觀	仙上
					ニ	八
					八	
③	ㄱ	コハ	記	墮	凶	三ミ
		コホ		墮	觀	法中
					四〇	一
					一	

④ カツム 通 高 三〇オー

カツム 通 観 仙エ 五五ス

⑤ コハシス 遠 高 三九五

コハシス 遠 観 仙エ 四六キ

即ち、①についていえば、「観智院本」のリの入声の位置の点は、ルの平声点であるべきものが、まちがって、わけのわからない位置に写されてしまったと解せよう。左側の点が、他の字の右側に写し誤られた例である。②では、「観智院本」の小書きのフは朱らしい。への点は、フの上声点であるべきもの。③の「観智院本」のルの去声の位置の点は、小書きのツの上声点であるべきもの。④の「観智院本」のシの入声の位置の点は、ムの平声点であるべきもの。⑤の「観智院本」の小書きのスの点は、スの上声点であるべきもの。但し、左側から右側に点が移行する過程は未詳。このように考えられよう。

現存・観智院本の声点にこういう例がある、ということとは、現存・観智院本の写点者は、彼が写そうとした文献の声点を、少なくとも右の諸例については、ろくに理解できないまま写したことを意味する。

III 声点の位置が書写の過程であいまいになる様子を示すと思われる今一つの例がある。

笑 笑思妙友 笑フ 高 六四オ

笑 笑上通下 忠妙メ 未ラフ
 エム エ 正未ラフ 未セフ
 観 仏中三 3
 L

「高山寺本」では、エム・エ・エワラフの三つのエには各々上声点がついている。それに対し、「観智院本」では、エムのエには上声点がついているが、その下の和訓エの点は上と平の中間に、エワラフのエの点はそれより少し下の位置についている。エム―エ―エワラフの順に、エの上声点の位置が下っているわけである。語源を同じくする語（ここではエ）ではじまる和訓が並ぶ時に、最初のものには丁寧に写点し、二つ目以下、同語源の部分の写点があらくなる、というのは、ありそうなことだと思う。

以上、声点の位置があいまいになりやすい一般的な場合二三について述べた。

三 東点のつけちがえの点

1 問題の所在

和訓に施された声点のよつてたつ声調体系が、六声の体系であると立証されている二つの文献、即ち、『金光明最勝王經音義』『圖書寮本類聚名義抄』において、《東点》は、周知のように、①形容詞終止形の語末のかなシ、②形容詞連体形の語末のかなキ、③サ変動詞の終止形をあらわすかなスに、集中的にあらわれる^{注6}。ところが、改編本系諸本では、これらのシ・キ・スのかなには、上声点が、時には平声の位置の点がついている。

「サガシ（平・平・東）（峻） 図一四三・六

サガシ（平・平・平）（峻） 観法上二〇七・二

サガシ(平平上)〔陰〕観法中四六³」

「阿克ヒノビス(○○○平平平)〔欠伸〕高八ウ³

阿克ヒノビス(○○○平平上)〔欠伸〕観仏上二⁸

阿克ビノビス(上上平平平)〔欠伸〕観僧中四四⁸

阿克ヒノビス(上上平平上上)〔欠伸〕鎮Ⅲ六二〇¹

☆ツミス(平上東)〔坐〕図二九⁴」

といった具合である。この現象をどう解釈すべきであろうか。

東点に代って上声点が表示される現象については、小松英雄氏が周到に論究された。即ち、氏は、先のシ・キ・スのかなの声点を、図書寮本と、観智院本・高山寺本とについて比較検討され、形容詞終止形語末のシの場合、図書寮本では東点と上声点との比率は50%対50%であること、観智院本では上声点約80%対平声点約20%、高山寺本では上声点85%対平声点15%であること、従って、上声点の比率が改編本と図書寮本とで、80%—50%≡30%というひらきがあることを明らかにされ、この事実を、

「平声輕の声点をもって代表されるところの、ある種の調値は、図書寮本の加點當時、すでに上声のそれに合流しつつあり、ときをへだてて成立したところの改編本は、この変化のおわりとする段階を反映している」

と解釈された。^{注6}

一方、右のシ・キ・スのかなのにつけられた平声の位置の声点であるが、これをどう解釈すべきかは、かなりむづかしい問題を含む。

金田一春彦氏は、「平声輕の点について(『国語学』41)」で、〈平安朝に成立した声点を記載した文献の大部分〉に、「平声

軽が施された根跡」が認められるとされ、『日本書紀』古写本について、

「原型としては平声軽をもっていた、それを転写者が……大ざっぱな人間であつたために、普通の平声の位置に写しちがえてしまった、その結果、現在見るような体裁になった」

として、その事例をあげ、更に、高山寺本『和名抄』、世尊寺字鏡』などの事例を示された。観智院本『類聚名義抄』については、

「現存の本における形容詞の語尾に施された声点に見られる不統一ぶりや、仏下末巻あたりを中心として見られる平声ではじまる動詞の表記に見られる変異は、その原本における平声軽の点の存在を示唆する有力な徴証のように思われる。」と述べられた。

平東上去の四つの点の中で、東と平とは他の点相互に比して位置が接近しあっている。声点をうつす際に、もしもそんなに写すなら、平点と東点とをつけ誤る率は、平点と上点、上点と東点とをつけ誤る率より高いであろう。平点の位置が字の左下の内側に入らず、左下である時（つまり図版Ⅱではなく図版Ⅰの時）はなおさらである。

下降調の音節（●）が高平調の音節（○）に合流していく時期に、六声の体系に基づいて差点された文献の声点を、後の人が写すとなると、東点が差されていても写点者がその意味をよく理解せずに写すとすれば、東点が、位置の近さから、平声の位置に写されることはあり得ることである。

ところで、ある文献の声点に、東点のつけちがえの点の存在を認めるといふことは、その文献の声点が写されたものであるといふことと、その文献の声点のよつてたつ声調体系が六声の体系であるといふことを前提とする。かりに、『類聚名義抄』の改編本系諸本に、東点のつけちがえの点を認めるとなると、改編本系諸本の声点（それは、原撰本成立期の語調を示すのではなく、改編本系諸本各々の祖本の成立期に普通におこなわれた語調を示すものである）^{注7}は、六声の体系に基づいているとみ

こまれていることになる。

現存の観智院本の和訓に施された声点の中には、位置としては「東」の位置に写された点は確かにある。しかし、本稿のはじめに述べたように、平東上去の基準位置からはずれた、あいまいな位置に写された点がたくさんあるからには、「東」の位置に写された点は、たま／＼「東」の位置に写されたのであって、「東」の位置に写そうと意識して写したという保証は求め難い。もしも、「東点」をそれと意識して写したのなら、大部分の声点は、平東上去のつばにきちんとおさまっていたにちがいない。あいまいな位置の点など入り込む余地はないであろう。現存観智院本よりも写しのよい現存高山寺本でも、和訓の声点に「東点」は認めにくい。

従って、改編本系諸本の和訓の声点に、かりに、東点のつけちがえの点の存在を認め得ても、その声点のよってたつ声調体系が六声のそれだとは決らないわけである。

ひるがえって、改編本系諸本は、平声に軽重を区別していないという見地にたてば、東点の期待されるかなにつけられた平声位置の声点は、筋として、東点のつけちがえの点とすることはできず、単なる誤点として処理することになる。

2 どんな場合があるか

改編本系『類聚名義抄』諸本の和訓の声点に東点のつけちがえの点を認めるかどうかには、上述の問題が内在するのであるが、ここでは、仮に「東点のつけちがえの点」の存在を認めるとした場合、その例はどれほどあるか、どんな分布を示すか、どこまでを「東点のつけちがえの点」と認めてよいか、といったことを取り上げてみたい。

『金光明最勝王経音義』『図書寮本類聚名義抄』の和訓のかなに施された「東点」をよりどころとしながら、本稿の調査対象とする諸文献の中から「東点のつけちがえの点」をぬき出し、それを、

① 形容詞終止形語末のかなシの場合

② 形容詞連体形語末のかなキの場合

③ サ変動詞の場合

④ サ変以外の動詞の場合

⑤ 非活用語（除助詞）の場合

⑥ 助動詞・助詞の場合

の六つの場合に分類して列挙し、適宜、検討・考察を加えていくことにする。

ここにぬき出す「東点のつけちがえの点」とは、写しの甘い文献において、「東点」が期待されるかなにつけられた声点のうち、平声の基準位置の点、平声の基準位置の領域外のあいまいな位置の点、東の基準位置の領域外のあいまいな位置の点、たま東の基準位置に写された点——以上の点すべてを含む。平声点と上声点との中間に位置する点すべてを含むのではない。中程より上に位置する点は、上声点がぞんざいに写されて位置がや、下ったとも解せるので、ここでは除外しておく。

（あいまいな位置の点のまず表われない文献——『和名抄』諸本とか『日本書紀』古写本諸本といった万葉仮名に声点のついている文献など——については、「東点のつけちがえの平声の位置の点」とする方が適切である。本稿の調査対象とする諸文献の中にも、個別にとりあげればそうする方がよいと思う文献もある。本稿は「名義抄」を主軸とするので、諸文献を総括して、右のように扱ってみた。）

この「東点のつけちがえの点」は、誤点の類型に入るものとみるべく、単なるつけ誤りの点一般とは区別する必要がある。声点の認定にあたっては、以下、「東点」を（東）、「東点のつけちがえの点」を（△）として、双方を区別して記す。

なお、以下の記述は、周知の事実^{注8}ないしはそれに類することの羅列にすぎない部分が多いが、「平声軽が施された痕跡」の全貌を把握するためには、その「痕跡」を出来るだけさらってみる必要があると思うので、冗長にわたるが、あえて、当該

の事例を列挙する次第である。

① 形容詞終止形語末のかなシの場合

当該のシのかなに“東点のつけちがえの点(△)”のついているものは、次の如くである。これらのシの音調は(東)と同じく下降調(●)である。

「アカシ(上上△)〔赤〕	高四五オ2	イブカシ(平平平△)〔呀〕	観 仏中五六6
アカシ(上上△)〔赭〕	観 僧下八五2	イヤシ(平上△)〔佻〕	観 仏上二三8
アシ(平△)〔醜〕	観 僧下五〇6	イヤシ(平上△)〔偈〕	高一九ウ5
アタシ(上平△)〔他〕	高二一オ2	イヤシ(平上△)〔得〕	高一九ウ6
アタシ(○平△)〔他〕	観 仏上三三6	ウスシ(○○△)〔薄〕	観 僧上二八7
アツクシ(平上平△)〔茂〕	法一八ウ2	ウヤ々々シ(平平平平△)〔恭〕	観 僧上八4
アツシ(平平△)〔燐〕	観 仏下末四〇7	ウヤ／＼シ(平平○○△)〔恭〕	観 僧上五一3
アツシ(上上△)〔渥〕	鎮 Ⅱ九オ3	ウルハシ(平平平△)〔羨〕	観 仏下末二九2
アツシ(上上△)〔腆〕	観 仏中二四3	ウルハシ(平平平△)〔方〕	観 僧中三〇7
アマシ(上上△)〔甘〕	観 僧下八二3	ウルハシ(平平平△)〔艶〕	観 僧下一〇三一
アヤシ(平平△)〔神〕	観 法下3	ヲソシ(上x△)〔徐〕	字一四七6―ソには右肩に単点がある。
イサキヨシ(上上上上△)〔清〕	鎮 Ⅱ二ウ3	オナジ(平平△)〔同〕	観 僧下二〇六一
イソク ^{ガハシ} (平平上△)〔劇〕	観 僧上八六8	オホシ(平平△)〔衆〕	観 僧中六6
イタハル ^シ (平平上平△)〔勞〕	観 僧上八三2	オホシ(平平△)〔羨〕	観 僧中四一1

- カウバシ (上上上△)〔薰〕 観僧上 一五七
 カシコシ (平平平△)〔點〕 観仏下末 五五一
 カタクナシ (平上上上△)〔拙〕 観仏下本 七九二
 カタシ (上上△)〔斬〕 観僧中 七九六
 カタシ (上上△)〔難〕 観僧中 三六四
 カタナシ (上上上△)〔醜〕 観僧下 六〇六・鎮III 五七ウ1
 カマビスシ (○○平平△)〔聒〕 観仏中 7
 カラシ (上上△)〔酷〕 観僧下 五六八 | 平上上がふつう。
 キビシ (平平上△)〔毒〕 観僧上 四二四
 クラシ (上上△)〔晦〕 高九六ウ1・観僧上 一八五
 コシ (上△)〔滋〕 鎮II 6オ7
 コハシ (平平△)〔剛〕 観僧上 九四三
 コハシ (平平△)〔幹〕 色下 七ウ1
 コヒシ (平平△)〔暴〕 観僧上 二三・鎮III 五オ1
 コフ^ヒ (平^ヒ○平△)〔戀〕 観法中 一〇〇3
 サガシ (平平△)〔峻〕 字一 一五二4
 サガシ (平平△)〔嶮〕 観法上 一〇七2
 サガシ (平平△)〔岨〕 字一 四八5
 サガシ (平平△)〔阻〕 観法中 三八六
 サガシ (平平△)〔嶠〕 字一 四八3
 サジ (上△)〔狹〕 観仏下本 三〇3
 サシ (上△)〔狹〕 色下 四九オ1
 サシ (上△)〔窄〕 観法下 六四五
 サトシ (上上△)〔跂〕 観僧中 五五四
 サハガシ (平平平△)〔動〕 観僧上 八三5
 シゲシ (平平△)〔茸〕 観僧上 二一七
 シゲシ (平平△)〔蕃〕 観僧上 二二五
 シタシトテヒク (平平△平上上○)〔摘〕 観仏下本 四七2
 シハ、ユシ (平平平平△)〔鹹〕 観僧中 四二2
 シロシ (平○△)〔皓〕 観仏中 九四1
 スクナシ (平平平△)〔𪛗〕 観僧下 二七5
 スシ (平△)〔醴〕 観僧下 五八1
 スシ (平△)〔釀〕 観僧下 五九8
 スシ (平△)〔醋〕 観僧下 六〇2
 スポシ (上上△)〔窄〕 観法下 六四五
 セバシ (平平△)〔陝〕 観法中 四一1

- タカシ (平平△) (敲) 観僧中五六八
 タ、シ (平平△) (堅) 観法上九〇八
 タ、シ (平平△) (達) 高三二ウ三
 タ、シ (平平△) (正) 高四〇ウ四
 タ、シ (平平△) (直) 高四五オ五
 タ、シ (平平△) (殷) 鎮Ⅲ七一ウ五
 タ、シ (平平△) (周) 観僧下一〇五七・鎮Ⅲ三〇オ五
 タ、シ (平平△) (尹) 観僧下一〇六三
 チカケシ (平平△) (尤) 観仏下末二三三
 チカシ (平平△) (迫) 観仏上四九五
 トク_シス (去平上) (利) 観僧上九四三
 トシ (平平△) (逮) 高四五ウ五
 トシ (平平△) (聡) 高四七ウ六
 トシ (平平△) (按) 観仏下本五〇六
 ト、シ (〇平△) (標效) 観仏下本二九七
 トシ (平△) (信) 観法上四八三
 トシ (平△) (疾) 観法下一一三四
 トモシ (平平△) (賁) 高三四オ三
- ナガシ (平平△) (引) 観僧中二四五
 ナシ (平△) (末) 観仏下末一二三六
 ナシ^{カレ} (平△) (莫) 観僧上二二
 ナシ (平△) (箴) 観僧上七四・鎮Ⅲ七ウ一
 ナシ (平△) (欠) 観僧中四四八
 ナ、シノヲヨヒ (上上△○○○) (無名指) 観仏下本三九四
 ナラシ (平平△) (直) 高四五オ五・観仏上八四五
 ナラシ (平平△) (蠹) 観僧下九五七
 ナマグサシ (平平△) (鯉) 観僧下三七
 ネタマシヤ (平平△○○) (不分) 観仏下末二七二
 ハナハダシ (上上上△) (力) 観僧上八一
 ハナハダシ (上上上△) (甚) 観僧下八二六
 ハヤク_シ (平上平△) (早) 観仏中一〇〇八
 ヒトシ (平平△) (伧) 高六オ七
 ヒトシ (平平△) (黎) 観僧下一〇四一
 フカシ (平平△) (浚) 観法上二八五
 フクツケシ (平平△) (貪生) 観僧下九一六
 フルシ (平平△) (舊) 観僧上四八二

マサシ (平平△) (雅) 観僧中 二二五⁷マタシ (上上△) (完) 観法下 五三²ミニクシ (平平平△) (啼) 高七七七⁶ミニクシ (平平平△) (醜) 観僧下 六〇⁶ムナシ (上上△) (荒) 観僧上 八¹ムルシ (平平△) (監) 鎮 III 五〇⁴モロシ (平平△) (脆) 観仏中 二二三³ヤスシ (平平△) (懷) 観法中 八六³ヤスシ (〇〇△) (将) 観法上 四六²ヤスシ (平平△) (夷) 観僧下 一〇七⁵ヤツナシ (平平△) (臣) 観僧下 七五⁴

② 形容詞連体形語末のかなキの場合

当該のかなキ及びその音便形イに、東点のつけちがえの点

アザラケキ (平平平△) (鮮) 観僧下 二八⁸「アシキモノ (平平△平平) (耶鬼) 観僧下 四七⁸安之岐毛能 (平平△平上) (邪鬼) 和 厠 一五⁶ウレハシキ (平平平△上) (吁) 高七五五³オホイナリ (平平△〇〇) (柶) 観法中 一五〇⁵ヤハシ (平平△) (和) 字 二二五⁶ヤマシ (平平△) (閔) 観法下 七九³ヨシ (去△) (克) 観仏下末 一七²ヨシ (平△) (羨) 観仏下末 二九²ヨシ (平△) (善) 観仏下末 二九⁵ヨシ (平△) (咎) 観僧下 一〇五⁵ヨハシ (平平△) (羸) 観僧下 九四²ワカシ (平平△) (若) 観僧上 四七⁵ワカシ (平平△) (幼) 観僧上 九四¹恵久之 (平平△) (齡) 和 伊世 一七¹²オ・ 厠 九⁵⁵ウハツカシム (平平△平△) (辱) 観法下 一〇九³

があるものに次の諸例がある。

オホイナリ (平平△〇〇) (王) 観法中 二二⁵オホキニス (平平△〇〇) (豊) 観法上 九五⁴オホキニス (平平△〇〇) (矜) 鎮 III 二三³ウ⁴(コハ)クネキ (〇〇平平△) (強認) 観法中 二三⁸シロキモノ (平平△平〇) (粉) 字 二二六³

之路岐毛能(平平△平平)〔粉〕和〔伊〕_{二四} 19オ5

多計岐比都(平平△上平)〔壯士〕和〔圖〕_{一三} 13オ9

知比佐岐古介(平平平△平平)〔石衣〕和〔圖・圖〕_{六八} 68ウ7

チヒサキタコ(平平平△平平)〔小鮫魚〕觀僧下_{二三} 7

トキウマ(平△○○)〔駿馬〕觀僧中_{九九} 1

止岐宇万(平△平平)〔駿馬〕和〔伊〕_七 17オ9・〔圖〕_七 16オ8

トキサキ(平△上上)〔鋒〕觀僧上_{二六} 3

スコシキに問題がある。キの点の位置は「觀智院本」の二例は東、他の二本の例は平である。これらの点を(△)と認定するのは、「圖書寮本」の次の例をよりどころにしてである。

「スコシキ(平上平東)〔細〕 圖二九八三」

ところが、スコシキにはきに上声点をつけた例が見当たらない。●↓●●という現象がこの語ではおこらなかったらしい。キが独立性を失って単語結合の型を形成すれば、スコシキは○●○●↓○●○●となる。改編本系諸本の時期に、結合に至っていたとみれば、キの点は低平調標示の平声点と認定される。結合に至る時期をどうみるかによって、キの点の認定は動く(△?)としておく。

③ サ変動詞の場合(「字音語+サ変動詞」を除く)

(a) 終止形のかなスに「東点のつけちがえの点」がついているものに、次の諸例がある。

「ス(△)〔爲〕 觀 仏下末_{二九} 8

ス(△)〔爲〕 觀 僧下_{七九} 6

フルキネ(平上△○○)〔陳根〕 觀 法中_{四六} 2

ミジケキヤ(平平平△去)〔庫鷹〕 觀 法下_{二〇} 4

ナイガシロ(平△平・平平)〔無〕 觀 仏下末_{五一} 4

ナイカシロ(平△○○○)〔已〕 觀 法上_{九七} 1

スコシキ(平上平△?)〔微〕 高_{二〇} 7

スコシキ(平上平△?)〔廢虫〕 觀 僧下_{二六} 1・鎮_三 九八ウ5

スコシキ(平上平△?)〔少〕 觀 僧下_{七五} 3

トス(○△)〔將〕 鎮_二 四ウ6

トス(○△)〔欲〕 鎮_三 六三ウ7

クルマザキニス(上上上上上上△)〔鬟〕 観 僧中八六六

モテス(平上△)〔湏〕 観 仏下本三〇七

シキキニス(○○○○△)〔茹〕 観 僧上二六六

アクヒノビス(○○○平△)〔欠伸〕 高 八ウ三

シナ／＼ニス(○○○○上△)〔品〕 観 仏中二六三

アクビノビス(上上平△)〔欠伸〕 観 僧中四四八

ニコ、ンス(平平平△)〔輒然〕 色 上四〇ウ二

豆流比湏(平平平△)〔孳尾〕 和 僧上七
10ウ1・ 蘭 七 10オ2

比平加々利迹湏(平上上上上上△)〔篝火〕 和 僧上二二六オ3

モス(平△)〔喪〕 高 四四五ウ二

また、^ク東点のつけちがえの点(△)で下降調(●)を標示すると、平声点で低平調(○)を標示すると、解釈によって認定が動くものに次の例がある。

「アツシ(上上○)〔敦〕 観 僧中五七五

ヨクス(去平△)〔样〕 観 法下九八

アマネシ(平平上○)〔周〕 鎮 Ⅲ一三〇オ5

ヨクス(去平△)〔尅〕 観 法下一四四4

イサギヨシ(上上上○)〔綯〕 観 僧下六八6

ヨミス(去平△)〔好〕 観 仏中一四2

トクス(上平△)〔跪〕 字 一五五4

カタムス(上上平△)〔詗〕 観 法上五四8・ 鎮 Ⅱ二九オ7

ナカウス(平上平△)〔永〕 観 法下四一7

ヤスシ(平上○)〔康〕 観 法下一〇五7

形容詞の連用形にスのついた右の諸例は、単語連続とみればスの点は(△)、単語結合とみればスの点は(平)となろう。

「イキス(平上△)〔嘘〕 色 上六ウ5

サイハヒス(上上上上△)〔寔〕 観 法下五四5

ウカミス(上上上△)〔間謀〕 観 法下七七2

ヒデツス(上上○△)〔旱〕 高 九六オ2

古加比湏(上上上△)〔蠶〕 和 僧上二二四25オ7

この五つは、高く終る名詞にスがついた語である。スの固有の語調が保存されているとみればスの点は(△)と認定される。しかし、曲調が平調化する時期に、スの下降調の前半の高い部分が、直前の高平調と同化して、[●](名詞) + [○](ス)

↓:●○」となり、スは低平調と同じかたちになる、という現象がおこらなかったとはいきれないであろう。

(b) サ変動詞の連用形のシのかなり東点のついた例は未見である。その意味での裏付けはない。金田一氏は、サ変の連用形シは、『四座講式』の時代まで●型だったと推定された。^{注9} 例に、

「シテ(△平)〔将〕 観_{法上}四六_二」

があげられようか。但し、テは(上)が普通である。一方、シの点を(平)とみると、シテは(平平)となる。これは、音の高低の配置としては、シテ(上上)と同一である(類例は法上の巻にも見られる)。

(c) セの場合。東点の例は未見。

「セ(△)〔爲〕 観_{仏下末}二九_八

セ(△)〔爲〕 観_{僧下}七九_六

カウブリセリ(平平上平△平)〔弁〕 観_{仏下末}三三_七」

④ サ変以外の動詞の場合

(a) 終止形

サ変以外の動詞の終止形で、東の差点があるのは、

「八徒(平東)〔恥〕 金_{三五ウ五}」

である。

一方、第二类動詞の終止形の語調は、○●、○○●であろうと推定されている。^{注10}

これに該当する動詞終止形の語末のかなり「東点のつけちがえの点」がついているものには、以下の諸例がある。

「アシキル(平平平△)〔肝〕 観_{僧上}八九_一

アフラス(○○○平△)〔脂〕 観_{仏中}二三_六

イク(平△)〔殺〕 観僧中 六七一
 イル(平△)〔剪〕 色上 九ウ7
 ウフ(平△)〔餐〕 鎮III 三四オ7
 ウレフ(平△)〔憂〕 観僧中 五三7
 オゴク(平上△)〔購〕 観法上 八九4—ゴ(平)がふつう
 オコク(平△)〔蒞〕 観僧上 五一2
 オコル(平△)〔熙〕 観仏下末 四七3
 オコル(平△)〔興〕 観仏下末 二六一
 オソル(平△)〔兇〕 観仏下末 一六七
 オホス(〇〇△)〔被〕 観法中 一四六5
 オホフ(平△)〔覆〕 観法下 七一6
 カ、ル(平△)〔濂〕 観法上 二二7
 カ、ル(平△)〔駕〕 鎮III 八〇ウ2
 カギリ(平△)〔隄〕 観法中 三八4
 カク(平△)〔係〕 観仏上 三四4
 カク(平△)〔畫〕 観僧中 一四7
 カシク(平△)〔爨〕 観仏下末 四〇3
 カシク(平△)〔燂〕 観仏下末 四五7

カゾフ(平△)〔數〕 鎮III 六六ウ3
 カタル(平△)〔和〕 観仏中 四九6
 カハク(平△)〔烜〕 観仏下末 五二7
 カマフ(平△)〔結〕 観法中 一二1
 キハム(平△)〔谷〕 観仏下末 三〇5
 キル(平△)〔戡〕 観僧中 四一4
 クソヒル(平△)〔痢〕 字一 六3
 クダク(平△)〔璣〕 観法中 二五7
 クヅル(平△)〔頽〕 観仏下本 三〇5
 クロム(平△)〔騷〕 観仏下末 五六2
 コグ(平△)〔渭〕 色下 八オ5
 コボル(平△)〔壞〕 観法中 六五8
 サク(平△)〔擗〕 観仏下本 六九1
 サケシタム(上上平△)〔醜〕 鎮III 五六オ2
 サス(平△)〔旨〕 観法中 九八8
 サス(平△)〔差〕 観仏下末 二八1
 サダム(平△)〔弊〕 観仏下末 三三6
 サハグ(平△)〔臬〕 観仏下本 二五7

サハグ(平平△)〔開〕 観法下七六₂
 シサル(平平△)〔赴〕 観仏上六五₃
 スグ(平△)〔過〕 観仏上五七₃
 スク(平△)〔汰〕 観法上八₄
 スグ(平△)〔愆〕 観法中八四₂
 スム(平△)〔澄〕 観法上二七₄
 セク(平△)〔壅〕 観法中六六₅
 セマル(○平△)〔迺〕 観仏上五九₂
 セム(平△)〔責〕 観仏下本一六₅
 タスク(平平△)〔扶〕 観仏下本五一₁
 タスク(○○△)〔繕〕 観法中二八₃
 タツ(平△)〔斷〕 観僧中三四₂
 タノム(平平△)〔頼〕 観仏下本二六₆
 ツク(平△)〔付〕 観仏上七₆
 ツク(平△)〔拄〕 観仏下本六三₅
 ツクル(平平△)〔營〕 観仏下本五〇₈
 ツクル(平平△)〔出〕 観法上二二三₃
 テル(平△)〔輝〕 観仏下本三二₂

トテル(平平△)〔煥〕 観仏下本三九₈
 テル(平△)〔燭〕 観仏下本四二₆
 テル(平△)〔爛〕 観仏下本四二₇
 トム(平△)〔趁〕 高三六₄
 トモス(平平△)〔炳〕 観仏下本四二₄
 トル(平△)〔拈〕 観仏下本四五₆
 ナグ(平△)〔投〕 観仏下本七七₂
 ナゲク(平平△)〔噫〕 観仏中四八₅
 ナム(平△)〔啜〕 高七〇₄
 ナレタリ(平上平上△)〔藝〕 観僧上四五₂
 ナルタリ(平△平上_上?)〔藝〕 鎮Ⅲ2ウ2―リの点△か
 ニグ(平△)〔行〕 観仏上四二₈
 ニク(平△)〔逃〕 観仏上五七₃
 ニグ(平△)〔迹〕 観仏上五七₄
 ニジル(平平△)〔轢〕 観僧中八四₅
 ネル(平△)〔鍊〕 観僧上一三三₃
 ノブ(平△)〔流〕 法四七ウ₂
 ハク(平△)〔嘔〕 高六六ウ₆

ハラフ (上平△)〔撃〕 観 仏下本 六〇五一ハ(平)がふつう

ヒラク (平平△)〔辯〕 観 仏下本 六九一

フク (平△)〔風〕 鎮 III 二四ウ7

フセク (平平△)〔禦〕 観 法下 六7

ホム (平△)〔羨〕 観 仏下末 二九2

マカス (平平△)〔任〕 観 仏上 二8

マホル (平平△)〔營〕 観 仏下末 五〇8

マモル (平平△)〔執〕 観 仏下末 一八3

ミダル (平平△)〔勃〕 観 僧上 八四6

ヤフル (平平△)〔中〕 観 仏上 七九7

ヤブル (平平△)〔夷〕 観 仏下末 三四8

ヤム (平△)〔盱〕 観 仏中 九一7

ヤム (平△)〔閔〕 観 法下 七九3

終りの四例、第二類動詞ではない。

シメスについては、金田一氏は後の例をあげて、スは平軽声だったかとされている。^{注11}

オサフは、高山寺本・観智院本ともに、(上平上)が優勢である。これは●○○↓●●と考えられる。そう見れば、右の二例のフの点は“東点のつけちがえの点(△)”とみなせる。ただし、(上平平)でないともいいきれない。(上平上)から(上平平)への推移の時期をどうみるかにより、フの点の認定は動く。

ユスル (平平△)〔汔〕 鎮 II 二ウ1

ユルス (平平△)〔縦〕 観 法中 一三四4

ユルフ (平平△)〔爛〕 観 仏下末 四二1

ワカツ (平平△)〔分〕 観 仏下末 二六8

ワク (平△)〔體〕 観 仏下本 五5

ワク (平△)〔分〕 観 仏下末 二六8

ヲサム (平平△)〔遁〕 観 仏上 五五2

ヲサム (平平△)〔討〕 観 法上 六二6

シメス (○○△)〔喻〕 高 六二オ7

シメス (上平△)〔示〕 観 法下 一2

オサフ (上平△)〔依〕 高 一九オ1

オサフ (上平△)〔晉〕 観 仏中 八九5

なお、ネガフ・テラスなど、(平上平)と(平上上)と二つのかたちがある語については、どちらのかたちとみるかによって、語末のかなにつけられた、あいまいな位置の点の認定は動くので、ここでは除外した。

また、仮名の字形上、上声点のズレか、「東点のつけちがえの点」か紛らわしいとみて省いたものに、アカツ・ウツ・オヒウツ・カツ・タツ・ミツ・モツ・ユツのツにつけられた点(ツ)、イタム・ウム・ツツム・ノム・ヲサムのムに付けられた点(ム)、オボユ・クユ・のユにつけられた点(ユ)がある。

(b) 連用形

サ変以外の動詞の連用形で、東の差点があるのは、

「キテ (東上) (衣) 図三七一

シツメタリ (平上・東○○) (靖) 図二六四^{注12}
である。

これをよりどころに「東点のつけちがえの点」の例を求めると、次の諸例がある。

「キクフ (△平上) (衣食)

観法中 三六八

☆キイクフ (上平○○) (衣食)

観僧上 二四六

コヒネガフ (平△平平○○) (羨)

観仏下末 二七五

コヒネカフ (平△○○○○) (庶幾)

観法下 一〇四六

コメカフ (平△○○○) (圈)

観法下 八四一

サシタツ (平△○○○) (炙)

観仏下末 三九五

カネタリ (平△○○○) (與)

観仏下末 二五六

コエタリ (平△○○○) (臍)

観仏中 一一四五

ワカレタリ (平平△○○○) (分)

観仏下末 二六八^{注13}

金田一氏は第二類動詞の連用形のうち、第一種を○○●、○○●とし、第二種を○○●、○○●とされる。また、助動詞タリにつづく形を、第一種とも第二種ともどちらともとれるが第二種とみる方が妥当かとされる。列挙した諸例のうち、終りの

三例はタリに続くかたちである。カネのネ、コエのエ、ワカレのレの点を(△)とみれば、この三つは第一種からタリに続くことになる。一方、タリは第二種からつづくということを優先させると、カネのネ、コエのエ、ワカレのレの点は、上声点を誤って下の方につけてしまった誤点ということになろうか。

(c) 東平(↓上平)型の動詞

動詞の終止形に(東平)の差点のある確かな例は、

「ヌル(東平)」「泥」 図三九四

である。これをよりどころにすると、ヌルのヌに「東点のつけちがえの点(△)」のある例として、

「スミヌル(平平△平)」「黒」 観仏下末五三八

があげられる。

東平(↓上平)型の動詞には、今一つユクがあると思う。次の例がそれである。

「ユク(東平)」「足」 図一〇二二——図版Ⅲ——

とすれば、次のユクのユの平声の位置の点は、「東点のつけちがえの点」とみて説明がつく。

「ユク(△平)」「傍徨」 高三〇ウ6

ユク(△平)「邁」 高二九オ6

ユク(△平)「遼」 高三〇オ6

ユク(△平)「通」 高三〇ウ3

ユク(△平)「将」 観仏下末八4

ユク(△平)「游」 観法上「七八」

⑤ 非活用語(除助詞)の場合

(a) 東点の確かな例があり、「東点のつけちがえの点」であると裏付けられるものに、次の諸例がある。

カチ^上チ^上リ
ユウ^上チ^上リ
ユウ^上チ^上リ

〔図版Ⅳ〕〔図版Ⅲ〕

「アブ(平△)〔虻〕 観僧下二九₂

☆阿父(平東)〔蚶〕 金一三ウ₅

アセミゾ(平平平△)〔汗溝〕 観法上四一₃

— 第二字サはセの誤写とみる —

阿世美蘊(平平平△)〔汗溝〕 和伊廿一一_{11ウ}

阿勢美蘊(平平平△)〔汗溝〕 和伊廿七_{20オ・京} 卅七_{19オ}

☆阿世美蘊(平平平東)〔汗溝〕 図一三₆

衣(△)〔江〕 和卅一_{6ウ}

☆衣(東)〔江〕 図六₃

古美都(平平△)〔白飲〕 和卅四_{10ウ}

☆コムツ(平平東)〔漿〕 図五₃₅

コエ(平△)〔風〕 観僧下五一₁

☆コエ(平東)〔音〕 図一二₆₂

サゾ(平△)〔如此〕 観法上九九₇

☆佐蘊(平東)〔如此〕 図二四₂

豆久利美豆(平平平△)〔漿〕 和卅四_{10オ}

☆都久利美豆(平平平東)〔漿〕 図五₃₅

ツネニ(平△上)〔扶〕 観仏下本五一₁

ツネニ(平△上)〔永〕 観法下四一₇

ツネニ(平△○)〔庸〕 観法下九四₆

ツネニ(平△○)〔方〕 観僧中三〇₇

ツネニ(平△上)?〔或〕 観僧中三九₅

ツネニ(平△上)〔夷〕 観僧下一〇七₅

ツネニ(上△○)〔尋〕 観法下一四三₂

ツネニ(上△上)?〔喂〕 観仏中五七₃ — ネの平声位置の点は、ツネ●

●とみれば△、●●●●と変化しているとみれば(平)となる。

ツネニ(○△○)?〔每〕 観法下四一₆ — ネの点は平のや、上より。ツ

ネは、○●●●●(●●●●)とも(平)とも決らない。●○の三つの場合があり得る。ネは(△)

☆ツネ(上東)〔常〕 図二七₇

☆ツネニ(上東上)〔恒〕 図二五₂

ツヒニ(平△○)〔勢〕 観仏下本五〇₆

ツヒニ(平△○)〔為〕 観仏下本二九₈

ツヒニ(平△○)〔竟〕 観仏下本一六₆

ツヒニ(平△○)〔肆〕 観仏下本三三₃

ツヒニ(平△上)〔訖〕 観法上五二₃

ツヒニ(平△○)〔弥〕 観僧中二五₆

ヤ(△)〔矢〕 観 僧 中 三 一

夜(△)〔箭〕 和 伊 出 一 三 一 二 三 五 一 一 〇 〇 五 三 六 〇

アメ(平△)〔雨〕 観 法 下 六 五 八

アカキ、ビ(上上上○△)〔丹黍〕 観 法 下 一 九 六

久毛(平△)〔蜘蛛〕 和 伊 出 八 三 九 〇 〇 八 三 七 〇

“東点のつけちがえの点”の範圍を、もしも、東点を差された確かな例によって裏付けされ得る場合だけに限るとすれば、右の諸例は(△)と認定せずに保留しなければなるまい。一方、方言からの類推を尊重する立場にたてば、当該の音調は●であると認め、東点の確かな例のある前述の諸例を、同じ立場から批判しなければなるまい。声点認定の方法上厳正を期せうとすると、立場によって、厳密には認定が分れるであろう。

(c) そのほかに、次の一つがある。

「ヤ(△)〔幅〕 観 僧 中 九 〇 六

夜(△)〔幅〕 和 伊 出 一 一 六 〇

☆ヤア(上平)〔幅〕 観 僧 中 九 〇 六

⑥ 助動詞・助詞の場合

助動詞・助詞の語調については、にわかに決め難い問題が多いので、あいまいな位置の点についても、その認定はむづかしい。ここでは、完了の助動詞リとヌにふれるにとどめたい。

(a) 完了のりの終止形のかな「リ」に、東点がさされている確かな例として、『図書寮本類聚名義抄』に、

「タテリ(平上東)〔童〕 図 一 三 一

がある。ところが、タテリと同じく○●型に続く「リ」には、次の例のように、平声点が差されていることが多い。

「ナヤメリ(平平上平)」「認」 図八六二

差点の精密な『図書寮本類聚名義抄』において、○●型に続く「リ」に、(東)と(平)とがあるとなると、声点の写しの悪い改編本系諸本の、○●型に続く「リ」につけられた「あいまいな位置の点」は、どう認定すべきか、むづかしいことになる。

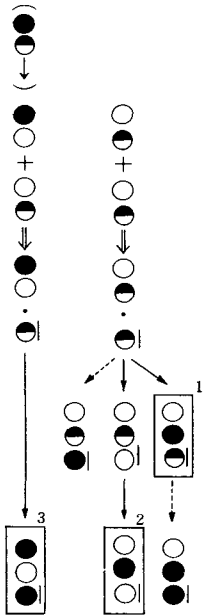
下降調の音節(●)は、高平調の音節(●)に合流する。「リ」の場合も、●○、●○○などの●○型に続く「リ」には上声点が差されている。

「マサレリ(上上平上)」「愈」 図二四七

○●型に続く「リ」が、なぜ、○●●↓○●●↓○●●↓○●●があらわれるのだろうか。

「動詞+完了の助動詞リ」というかたちは、さかのばれば「動詞連用形+アリ」だといわれている。アリは○●とされている。とすると、「連用形+アリ」から「動詞+リ」に至る過程は、次のように考えられよう。

〔連用形+アリ〕↓〔動詞+リ〕



〔注〕―はリの音調。□は『図書寮本』に現存するかたち。

右の図の左側の過程には特に問題はない。右側の過程では、「動詞+リ」のはじめの段階で、○●●・●と下降調の音節が二つ

続く。曲調の連接を避けて下降調の一つが平調化する。この際、二つ目の下降調を保存する方向で平調化すると、○●・●↓○●●となる（これは、●↓●の合流であるから、自然に行われる）。タテリ（平上東）はこれである。一方、はじめの下降調を保存する方向で平調化すると、可能性としては、○●・●↓○●●となる場合と、○●・●↓○●○となる場合とがありそうである。○●●は、○●○にくらべて発音しにくいから、これは○●○への方向を辿るであろう。下降調の平調化が更に進行する時期に、○●○は○●○となる（●↓●の合流）。これがナヤメリ（平平上平）である。つまり、○●○は○●○から転じたかたちではないとみるのである。なお、○●○↓○●●の変化は、ごく自然に行われそうであるにもかかわらず、○●型に続く「リ」に上声点をさした例は未見である。前述のように、『図書寮本類聚名義抄』には、○●○と○●○の二つのかたちが併存する。従って、○●型に続く「リ」の下降調が保存されにくくなると、○●●は既成の○●○に吸収されてしまうのではなからうか。

「東点のつけちがえの点（△）」の認定の問題にもどうう。改編本系諸本の、○●型に続く「リ（終止形）」につけられた声点は、東の位置の点・平声の位置の点・東の近辺もしくは平の近辺のあいまいな位置の点と、雑多である。これらの声点の認定は、「リ」の下降調がいつまで保存されているとみるか、その時期の見方によって、「東点のつけちがえの点（△）」とも、（平）ともなると思う。

(b) 東点の確かな例のある今一つの助動詞に完了のヌがある。

「ヲハヌ（上東東）（訖） 図九六」

これをよりどころに、○●型に続くヌについて、その声点の位置を検討してみると、「東点のつけちがえの点（△）」かと疑えるものに、平声の位置に写された二つの点、

「アケヌ（上平△）（明） 観 仏中八七」

カケヌ(上平△)〔月暖〕 観 仏 中 九 一 一

がある。「観智院本」では、ヌは、●○型に高くついている(ツキヌ、クレヌ、ヤムヌ)。「観智院本」の時代に、助動詞がその固有の語調を保っていたとする見地にたてば、右のアケヌ・カケヌのヌの点は、「東点のつけちがえの点(△)」と認められる。一方、右の二例を単語結合の早い事例とみれば、平声点と認定される。

助動詞の中には形容詞性のものがある。それらの語末のシ・キのかなにつけられた声点の認定には、形容詞語末のシ及びキの下降調との関係上、吟味しなければならない問題がある。

3 (東)か(平)か疑問のもの——『圖書寮本類聚名義抄』における——

以上、諸文献に表われる「東点のつけちがえの点(△)」と認定できるもの、及び、その疑いのあるものをあげ、適宜、検討・考察を加えてきたつもりである。

「東点のつけちがえの点(△)」の認定に際しては、『東点』の確かな例があるかどうかを、第一のよりどころとしてきた。そのよりどころとなる文献は、いうまでもなく、承暦本『金光明最勝王経音義』と『圖書寮本類聚名義抄』である(他に、『日本書紀』古写本諸本にも東点がある。これもよりどころになる。たゞ、その場合は、『日本書紀』古写本諸本の声点のよってたつ声調体系が六声の体系であるという証明はなされていないことに留意しなければなるまい)。

ところで、『圖書寮本類聚名義抄』の和訓に施された『東点』は、小松英雄氏が指摘されたものに^{注13} スミツボ・ハシツボのボの点と、^{注14} ュクのユの点(?)をふくめたものが、果してそのすべてだろうか。二三疑わしいものがないでもない。それをあげておく。

(a)「於以加介」(平平平?) (綏) 図三二一6

☆於以加計(平平平平) (綏) 和伊廿二 32ウ6

於以加計(平平平上) (綏) 和宮前四 2ウ2

(b)「保々湏介」(平平平?) (綏) 図三二一6

☆保々湏介(上平平上) (綏) 和伊廿二 32ウ6

保已湏介(〇〇平平) (綏) 和宮前四 2ウ1

ホ、スケ(平平平上) (綏) 観法中 二五5

右の二つの「介」の声点は、「図書寮本」の「介」の平声点の位置(七3・四七1・四七1・六八7)に比べて、や、高いとみるがどうかであろうか。

(c)「比多米」(平?平) (襃積) 図三三八6

「多」の複点が位置・自体としては平声点より高く、東の位置に差されている(小松英雄氏の御教示による)。

(d)「タテリ」(平上?) (峙) 図一三八5

「リ」の点は平声点の疑いがある。

(e)「スコシキ」(平上平?) (小) 図二七五2

「キ」の点は平声点の疑いがある。

4 まとめ

「東点のつけちがえの点(△)」は、諸文献においてどんな分布をしているだろうか。三2に列挙したもののうち、解釈によつて認定が動くとしたものを除いて、文献別にその分布を整理してみた。その結果は次の表の如くである。

前田 本色葉字類抄	法華 經單字	類聚 名義抄											高山 寺本	文 献	東点のつけちがえの点 の表われる場合
		鎮国 守国 神社本	観智院本												
下上		ⅢⅡⅠ	僧 下	僧 中	僧 上	法 下	法 中	法 上	仏 下末	仏 下本	仏 中	仏 上			
2		6 3	20	11	22	7	4	5	8	7	6	3	13	形容詞終止形シ	
		1	2	1	1	1	4	1					1	形容詞連体形キ	
1		1 1	1	2	1				1	1	1		2	サ変終止形ス	
1 1	1	6 1	6	5	7	10	8	27	12	5	11		8	サ変以外の動詞	
	1		4	3		3	1	3	3	2	3		a	非活用語 (除助詞)	
1			1	3	2		1	1		1		1	1		b
			2										c		
4 2	2	14 5 0	27	26	32	20	19	18	40	22	16	14	25	合計	

和名類聚抄	岩崎本字鏡	文 献		“東点のつけちがえの点” の表われる場合
高山寺本 伊勢廿卷本 伊勢十卷本 京本 前田本	二一			
11	14	形容詞終止形シ		
4111	1	形容詞連体形キ		
111		サ変終止形ス		
	1	サ変以外の動詞		
65121		a	非活用語 (除助詞)	
32221		b		
1		c		
1310582	25	合計		

“東点のつけちがえの点(△)”は、本稿の調査対象としたどの文献にも、その数に多少はあれ、存在すること、表に見る通りである(鎮国守国神社本Ⅰは、声点のあるものが巻頭の13の和訓に過ぎないから、この際除外してよい)。

観智院本に限ってみると、“東点のつけちがえの点(△)”は、どの巻にも散在している。先学の指摘^{注15}の通り、特に仏下末に多い。仏下末のページ数は他の巻の半分に満たないのであるから、合計数40というのは注目すべき数である。仏下末の声点は、観智院本の他の巻におけるよりも、少しさかのぼる時期の語調を示しているのかもしれない。

また、『和名類聚抄』諸本に及べば、“東点のつけちがえの点”をもし認めるとすれば、その和名・和訓の声点のよってたつ声調体系は、四声の体系だとはいきれないことになる。

『法華経单字』も、原本に平声の軽重の区別がなかったとは断定しにくく、現存本は声点も写されたものである疑いが残る。大体、先に三1で述べたように、“東点のつけちがえの点”の存在を認めることは、その声点がうつされたものであること

タル・ツク・ヒク……がある。

「ワタリ^ル（上上上^平）〔徑〕 高三ウ³

ワタル^リ（上上上^上）〔徑〕 観^上四〇⁴

「ツク（上平）〔衝〕 高二四オ⁵

ツク（上上）〔衝〕 観^上四三⁷

「ヒク（上平）〔引〕 高二二オ⁷

ヒク（上上）〔引〕 観^上八〇⁷

「ヤル（上平）〔去〕 高四五オ³

ヤル（上上）〔去〕 観^上八四³

観智院本では終止形、鎮国守国神社本では連体形の声点のあるものとしては、ウタガフ〔貳〕・キザム〔刻〕・キザム〔鏤〕・ケス〔鎔〕・ケツル〔刪〕があげられる。

一方、四段活用の動詞の言い切りになるかたちの語末のかなに、上声点と平声点との二つの声点のついている例がある。

「アキナフ（平平上^上）〔估〕 高一五ウ⁴

☆アキナフ（平平上^上）〔估〕 観^上二七³

終止形の語調は、アキナフ（平平上平）・スフ（上平）である。連体形となると、スフは（上上）と高くおわり、アキナフもフが高くなる。右の高山寺本のアキナフ・スフのフの二つの声点のうち、平声点は終止形の場合のフの音調を、上声点は連体形の場合のフの音調を示しているのではなからうか。思うに、高山寺本の時期に、アキナフ、スフは、終止形の語調で発音されることもあれば、連体形の語調で発音されることもあって、どちらか一つですまそうとすると実状にそぐわなかつ

「ハグ・ム（上上上平）〔省〕 高八八オ²

ハク・ム（上上上上）〔省〕 観^上七六⁷

「コトハル^リ（〇〇上平^〇）〔是〕 高九七ウ³

コトハル^リ（〇〇平上^マ）〔是〕 観^上九五⁴

「アタル^平（上上上平）〔當〕 高一〇四ウ⁷

アタル（上上上上）〔當〕 観^上二〇⁶「アタルアツ」を高

山寺本のようなかたちに表記し、それを誤つてアツルとなつたものか。声点は、アタル（上上上上）・アツ（上平）とみなせる。」

「スフ（上上平）〔噲〕 高六二オ⁵

☆スフ（〇〇）〔噲〕 観^上二七³

た——いいかえれば、アキナフ・スフにおいては、連体形による終止形の吸収がそういう段階にあった——それで、フに上・平二つの声点をさした、と思うのである。

このアキナフ・スフのような段階を経て、言いきりになるかたちには連体形の語調を示す差点をするに至るのではないかと考える。若干の例をあげておく。

「スフ（上上）〔呬〕 高六四ウ³ ミガク（上上上）〔砵〕 観法中四⁶

スフ（平平）〔呬〕 観仏中三二一音の高低の配置は上上と同じ。 ナク（上上）〔嚇〕 観仏中二八⁸

サラス（上上上）〔囀〕 高九六ウ⁶ イタル（上上上）〔底〕 観法下一〇七⁸

サラス（上上〇）〔囀〕 観仏中九三⁴ ヨル（上上）〔歸〕 観僧下八四³ etc.

サル（上上）〔謙〕 観法上五四⁵

右の諸例中、観智院本の諸例については、語末のかなの上声点が平声点のつけ誤りでないという保証はない。誤点といつてしまえばそれまでのことである。しかし、それらの声点をその位置のままに上声点と認定すれば、右の諸例は、改編本系『類聚名義抄』の時期に、四段活用の動詞の連体形が終止形を吸収するという現象がはじまっていたことを示しているとみることができる。

また、先に述べたように、高山寺本では終止形の声点のあるものに、観智院本では連体形の声点がついているのであるから、これを根據とする限りでは、現存高山寺本の声点は、現存観智院本の声点よりもややさかのぼる時期の語調を示すという公算が大きいことになる。

改編本系『類聚名義抄』の成立は、治承二年（二七六）以前であるといわれている。^{注16} 観智院本系の改編本の祖本（原本ではない）の成立時期は、現存観智院本の、仁治二年（二四二）の奥書の「…此書者以作者自筆草本書写之…尋清書之證本…」の解釈の仕方と、その解釈を治承二年以前に始った『類聚名義抄』改編の流れの中でどう位置づけるかによって、多少のユレはあろうが、観

智院本系の改編本の祖本の成立を、「仁治二年をそれほどきかのばらない」^{注17}とみることは、右に述べたことと照合して、さして矛盾をきたさない。

なお、現存鎮国守国神社本は、その声点からすれば、現存観智院本の声点よりも、いくらか後の時期の語調を示すのではないかと思われる。一方、改編本系諸本をその本文の上からみると、「高山寺本↓蓮成院本↓観智院本」という時間的前後が大局的には考えられる^{注18}といわれている。鎮国守国神社本は、蓮成院本系改編本内部における改編の流れの中で、遅い時期に成った本ではなかろうか。

注1 小松英雄「和訓に施された平声輕の声点——平安末期京都方言における下降調音節の確認——」（『国語学』29、昭和32年6月）。改筆改題されて『日本声調史論考』に収められている。

2 小松英雄「平安末期畿内方言の音調体系」（『国語学』39・40、昭和34年12月・35年3月）。改筆改題されて『日本声調史論考』に収められている。

3 観智院本の声点の位置については、金田一春彦氏が詳細に検討された。「類聚名義抄和訓に施されたる聲符に就て」（『国語学論集』）

4 小松英雄「日本声調史論考」第I部

5 注4の第3章、第4章・第5章

6 『日本声調史論考』五四六ページ

7 注4の第2章「語調史料としての『類聚名義抄』」

8 下降調を表わすみかけの平声点については、

金田一春彦「類聚名義抄和訓に施されたる聲符に就て」二十三節

金田一春彦『日本四聲古義』第六節

服部四郎「原始日本語のアクセント」一四〇一五ページ

南不二男「名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のアクセント」(『国語学』27、昭和31年12月)

桜井茂治「三卷本『色葉字類抄』所載のアクセント——形容詞・サ変動詞について——」

金田一春彦「平声輕の点について」(『国語学』41、昭和35年8月)

金田一春彦『四座講式の研究』(十三・十五・三)注2、(十三・十五・四)注1、(十三・二十四)注1などがある。

9 金田一春彦『四座講式の研究』三六一ページ

10 注9の文献の第三章

11 注9の文献の三七六ページ注1

12 他に、「ヲハヌ(上東東)(訖) 図九九」があるが、ヲハヌのハの東点は、ヲハリヌ(上上平東)と、元来、「上(ハ)平(リ)」というむすびつきの二つの音節であったものが、一つのかなで代表されるようになり、その仮名(ハ)に東点がさされるようになったものであるから、ここでは除外する。

13 注9の文献の三六〇ページ注1

14 「平安末期における「上東」型名詞の存否について」(『文学』昭和48年8月)

15 金田一春彦「平声輕の点について」

16 築島裕「改編本系類聚名義抄の成立時期について」

17 小松英雄「語調史料としての『類聚名義抄』」(『日本声調史論考』一二五ページ)

18 渡辺實「三寶類字集(天理図書館善本叢書2)」の解題二五ページ